

鈴木武雄先生—わがオマージュ

中内正夫

もだ
黙す師や
いづくかな
厳し愛し
富士吹雪く

His silence is stern——
That is so much more humane.
Oh, Mt. Fuji frozen!

台北帝国大学は、幾多の俊才を世に送り出した旧制大学のひとつであるが、わが鈴木武雄先生もそうした俊才のおひとりである。山形大学で長年教鞭を執られた後、先生は昭和47年に創価大学文学部英文学科教授として赴任して来られた。本学創立二年目のことである。その後、大学院創設と共に、アメリカ文学担当教授として院生の指導にも当たってこられた。遠い鎌倉の地から八王子まで、20年に垂んとする歲月、ご通勤なされたのである。

先生は、主としてアメリカ文学の研究に専念され、多くの研究成果を発表されてきた。中でも、「Jonathan Edwards の “a new sense”」、 「Edwards 観念論に対する Berkeley 影響説について」、 「Jonathan Edwards の精神形成—(I)祖先と遺伝—」、 「Jonathan Edwards の精神形成—(II)郷土と家庭—」といった、ジョナサン・エドワーズ (1703-58) に関する諸論文は、自然科学者、理想主義的哲学者、倫理学者、宗教的神秘主義者としての資質を具え、プリンストン大学の総長をも務めた、エドワーズを多くの資料を丹念に辿りなが

ら論じ、彼がアメリカ文学の源泉につながるゆえんを解明した、重厚な研究として貴重なものである。

さらに、先生はエマソン、メルヴィル、ホーソンなどにも鋭い眼識を向けられ、いくつかの論文にその深い造詣を示しておられるわけであるが、このことはエドワーズ研究の当然の成り行きでもあった。

それからまた、鈴木先生の日本語の美しさは、一冊の歌集として上梓するに十分な数にのぼる短歌に余すところなく伺えるのである。それは、例えば、角川書店から出版されている、ホーソン作『呪いの館』の翻訳にも遺憾なく発揮されている。同書店から出された、ヘンリィ・ジェイムズ作『ゴースト・ストーリー』となると、まさに名人芸というほかないのである。

今、触れた「短歌」といえば、「竹緒」という、先生のペン・ネームを思い出される人も多いであろう。先生は、毎年の賀状に、歌を一首そえてこられるのである。ここに平成3年度の年賀状の短歌がある。

君来ませ
 ^{きら}沙羅の大木
 ジャラの花
 ^{みなづき}水無月の頃
 君来給えや

「キ」音の繰り返しが、心底からの誘いを表わし、「サラ」と「ジャラ」のたたみかけが、俗塵を離れた「聖域」を含意している。長い修練を経たものにしかりえない詩境を感じるのだ。

先生は、日常は、極めて口数の少ないお人柄なのであるが、実に心優しい、“hospitality”に満ちあふれたお方に違いない。先生は、これまで意外と思われるくらいに多くの教え子たちを、ご自宅に招待しておられるようである。恐らく、そんな折にも、先生は決しておしゃべりはされずに、しかし絶えず笑みは浮かべておられたであろう。けれども、問いかけられたことには、あふれる

ばかりの蘊蓄を傾けて語られたらうと思われるのである。

先生の日本語に対する愛情は、また「書」の世界への関心に通じ、一流の書家たちの作品を所蔵されることにもなっていく。例えば、日本の英語学者として著名な、市河三喜氏の祖父にあたり、幕末の三筆の一人の、市河米庵の書をもっておられることを仄聞しているのである。さらには、江戸中期の儒者・細井平洲の自画像を所持しておられるそうだが、これなどまさに「国宝」ものというべきであろう。

先生は、アメリカ文学研究者として多くの業績を残しておられるわけであるが、^{おきなご}幼児のようなはにかみとかげひきなどの全くない誠実さをもっておられるところには、人間としての大きな魅力を感じずにはおられない。そして、間然するところのない服装にも、先生の自らへの厳正さと真摯さを思う。

昭和63年度の賀状に、ご夫婦おそろいで「喜寿傘寿」を迎えられて、「秀麗の蔵王」を越えてこられたとのお歌を寄せていただいた。確か、先生の兄上は、九十歳を超えられて、天寿を全うされた由を伺って、感嘆した記憶がある。

鈴木武雄先生、願わくば悠々自適をモットーに、ご令兄にあやかりながら、ご夫婦共々に仲睦じく、鎌倉の「秀麗」な自然に囲まれた、大人生の山並みを越えられんことを！

平成3年1月吉日